

## 第九回受賞作品 高良留美子『風の夜』



受賞にあたって

高良 留美子

もう十年以上前のことになりましたが、NHK第二放送の『季節の詩』という番組で丸山豊氏の「水の世界」という詩を紹介させていただき、その後テープをお送りして喜んでいただいたことがあります。丸山さんの二十三歳のときの、はじめての詩集『白鳥』からのものです。

わたしはこの詩から、水の循環、生命の、そして宇宙の循環という感じとつていたように思います。恋愛詩ではないかと、読みこんでみた記憶もあります。

その後、日本現代詩人会の六月の詩祭でお目にかかり、親しくお話したのですが、

一月もしないうちに亡くなられてしまいました。わたしは父方の祖先が久留米にいたという言い伝えをお話しし、楽しい時をもちました。

今後の詩集『風の夜』は、一度過去に遡行することを通して、戦争期に断ち切られた生命の循環をわたしなりに回復しようと試みたものです。この詩集のなかに、またこのたび尊敬する森崎和江氏と川崎洋氏というお二人の詩人を通してこの賞をいた

だくことのなかに、詩人丸山豊氏のおおきな存在が、静かな底流となって流れているのを感じます。

選考経過について

選考に際しては特に地域に限ることなく、一九九九年に国内で発刊された詩集・詩書を対象とし、本年一月十七日の選考委員会で、高良留美子詩集『風の夜』（思潮社）を選出しました。同詩集は戦後詩をのりこえようとする意欲的な試みの集大成であり、自然や他者と交流する新しい価値観を考えることによつて、二十一世紀へ向けてさらなるひろがりを見せた詩業であり、両選考委員はその点に感銘し一致して推挙に達した次第です。

二〇〇〇年一月二十三日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋

第十回受賞作品 高橋順子『貧乏な椅子』



受賞にあたって

高橋 順子

寒い夜でした。私は私の「貧乏な椅子」に坐ってふるえていたのですが、或る日ちらついていた雪がやんだと思ったら、春の日は差してきました。

そして川崎洋氏と森崎和江氏から嬉しい速達をいただきました。

両選考委員はこの国の人と言葉の運命に対して、深く思いをこらしてこられた方々です。

お二方が長い年月、敬愛なさってこられた丸山豊氏の御名を冠した賞をいただけますとのこと、願ってもないことに存じます。

私は丸山豊氏にお目にかかったことはございません。手元の「日本現代詩大系」をひもとき、遺された御作を改めて拝読、一個人を超えた、ひそやかで大きな悲しみとでもいうべきものに打たれました。

こうした詩を、育んだ風土に招いていただける、なんと刺戟的かつ幸福なことでしょう。いましばらく詩を書きつづけていけそうな気がしております。

どうも有り難うございます。

選考経過について

選考に際してはとくに地域に限ることなく、二〇〇〇年中に国内で刊行された詩集・詩書を対象とし、本年二月二十七日の選考委員会で、高橋順子詩集『貧乏な椅子』花神社刊を選出しました。

同詩集の、特に夫婦の日常生活の息づかいを普遍的にかつ平易に描きながら、ときに機知豊かに人情に機微をポエティカルに造形した点に感銘を受け、現代詩の流れの中で際立っていると、わたしども選考委員は一致して推挙した次第です。

二〇〇一年三月五日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋

第十一回受賞作品 まど・みちお『うめぼしリモコン』



万物が宇宙の意思に応じて心底生きるといふ願いを歌うまど・みちお詩の世界が、この新詩集によって、さらに研ぎ澄まされ、現代に対する批評という純粹な視点をも示した点に感銘を受け、わたしども選考委員は心からなる敬意とともに一致して推挙した次第です。

二〇〇二年三月五日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

森崎 和江  
川崎 洋

受賞にあたって

まど・みちお

まど・みちおと申します。名前だけが若そうな九十二歳の老人でございます。工業学校卒ですが、若い頃から低血圧で本が読めません。で、何も分らず何も知らぬほんとの無学で、自分勝手な詩作をつづけております。

この度こんな私に、天からのように立派な賞が降ってまいりました。勿体ないかぎりですが、厚かましくこの光榮に浴させて頂きます。かねて気恥ずかしく思っていました「うめぼしリモコン」も急に眩しく思えてきました。胸が熱くなります。アチラへ行くまでの束の間を、大事に励まねばと思えます。

アチラでは丸山豊さんにお目にかかり、敬意を表します。選者の方々を始め、賞に関わられた沢山のお方にあつくお礼を申し上げます。賞の生まれたふると久留米のみなさまのご健康とご多幸をお祈り申し上げてご挨拶と致します。

選考経過について

選考に際してはとくに地域に限ることなく、二〇〇一年中に国内で刊行された詩集・詩書を対象とし、本年二月二十六日の選考委員会で、まど・みちお詩集『うめぼしリモコン』理論社刊を選出しました。

第十二回受賞作品 金井雄二『今、ぼくが死んだら』



受賞にあたって

金井 雄二

まず最初に、どうもありがとうございます、とお礼を述べさせていただきます。そして正直なところ、びっくりしたとしか言えないので困っています。

びっくりしたのはもちろん理由があります。この丸山豊記念現代詩賞は、谷川俊太郎さん、新川和江さん等、現代詩の大御所が受賞される賞だと思っていたからです。そこから連絡がくるはずがないと思いついていました。また、久留米市には知人が一人もおりません。仕事関係でも知り合いはいないのです。何かの間違いだと思いました。選考委員の方のお名前を聞いてまたまたびっくりです。個人誌、詩集、何を送ってもお礼状の一枚も戴いたことのない方々でしたので。でもやっぱり読んでくれたんだ、というびっくりもあるのです。

びっくりが続いても、受けない理由はどこにもないので、(本当はものすごくうれしいのです。今、ぼくが死んでもいいと思うくらい) 謹んでお受けしたいと思います。

もうひとつ正直な告白をいたしますと、詩人丸山豊さんの作品をしっかり読んでいません。

今後熟読し、この賞に恥ずかしくないような詩作品を書き続けていきたいと思っています。

選考経過について

選考にあたっては、従来と同様に、とくに地域を限ることなく、二〇〇二年に国内で刊行された詩集を対象とし、本年二月二十七日の選考委員会において、金井雄二詩集『今、ぼくが死んだら』(思潮社)を選出しました。

生活に根差し地に足のついた抒情詩が、あまりに書かれることのなくなった昨今ですが、その点において、金井氏の詩集は確実に抒情詩の系譜のなかにあり、しかも新しい抒情の灯を、随所に点しています。丸山豊氏が開拓された「久留米抒情派」の名に恥じない一巻として、わたしども選考委員は、心からなる敬意とともに、一致して推挙した次第です。

二〇〇三年三月十八日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

清水 哲男

高橋 順子

第十三回受賞作品 中上哲夫『エルヴィスが死んだ日の夜』



地域に根ざした詩を！ — 受賞のことばに代えて

中上 哲夫

丸山豊のことを考えていて頭に浮かんだのは、アメリカの詩人ウイリアム・カロス・ウィリアムズのことだった。

ウイリアムズは、生涯ラザフォードというニュージャージー州の小さな町にすみ、三千体の赤ん坊を取り上げた。町の産婦人科医だったのだ。その傍ら、詩の歴史を変えようとする詩をつぎつぎと書いたのだ。福岡の久留米に生まれ育ち、生涯そこに住んで詩を書きつづけた丸山豊。かれの名前をきいてウイリアムズのことを思い出したのは、至極当然のことだったろう。

たとえば北園克衛がイタリヤの雑誌に詩を発表したように、二十世紀はインターナショナルの時代だった。そして、それはまた萩原朔太郎や中原中也に見られるように故郷喪失者の時代であった。

だけども、二十一世紀は地域の根ざした詩の時代となるであろう。たとえば《地域主義》を標榜するアメリカの詩人ゲーリー・スナイダーが、もっぱら自分がすんでいるカリフォルニア州の谷間のことばかり書いているように。

そろそろ、わたしたちは外部に向けていた目を自分たちが住

んでいる地域に向けるべきときではないだろうか。そうして、地域に根ざした詩を書くべきときがきたのではないかと。

そうした目でもう一度丸山豊の詩を読み返してみたら、新しい発見があるのではないかと思うのだ。

選考経過について

本年二月二十四日の選考委員会において、昨年中に国内で発行された詩集の中から、丸山豊記念現代詩賞に、中上哲夫詩集『エルヴィスが死んだ日の夜』（書肆山田）が選出されました。

浮ついていない仕方で、人生を抱きとめる詩人の姿をそこに想い描くことができず、どこか自分を突き放して見ているのか、軽妙さ、ほろ苦さが漂い、奥行きを感じさせる見事な詩業です。この詩集はすでに本年度の高見順賞を受賞し、評価が定まっているところではありますが、本賞にこそふさわしい、と意見の一致を見た次第です。

他の候補作には水野るり子詩集『クジラの耳かき』（七月堂）、松元泰介詩集『東京のマルテ』（ミッドナイト・プレス）の二作が挙げられたことをご報告しておきます。

二〇〇四年三月十二日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

清水

哲男

高橋

順子

第十四回受賞作品 森崎和江『ささ笛ひとつ』



受賞のことば

丸山豊先生には公私にわたって言葉には言い尽くせぬ恩恵に預かりました。私が心の底から師と仰ぐ、父性に満ちたお人柄でいらつしやいました。

恩師へ、つたない詩を捧げます。

みてごらん

地球の曲線がみえるよ

旅立つまえの詩人の声でした

その声

戦場を知る いのちの声

原生雨林に生きついでいた少数民族の

日常のくらしの現場で

何とたたかい

何を愛して骨となった戦友たちの  
泥沼の山河を  
その日も抱えている詩人の声でした

とわの旅  
昼も夜も白衣の医師  
身軽な住診でした  
戦場を知る詩人丸山豊  
千の無言  
詩のひとつ

選考経過について

本年二月二十五日の選考委員会において、昨年中に国内で発行された詩集のなかから、丸山豊記念現代詩賞に、森崎和江詩集『ささ笛ひとつ』（思潮社）を選出しました。

この国の懐かしいリズム感で書かれた抒情詩群。しかしその抒情の質は、懐かしさのみに片寄るのではなく、すぐれて現代的なきらめきを随所に内包しています。ひとりの人間の到達した心境の、その根底に横たわる歴史的社会的矛盾などが、読む者の胸を強くゆさぶらずにはおきません。

なお、他の候補作には一色真理詩集『偽夢日記』（土曜美術社出版販売）、日和聡子詩集『風土記』（紫陽社）の二作が挙げられたことをご報告しておきます。

また、昨秋、第一回から第十二回までの当賞選考に携われた川崎洋氏が急逝されました。長年にわたるご尽力に感謝するとともに、深く哀悼の意を表します。

二〇〇五年三月十三日

丸山豊記念現代詩賞選考委員 清水 哲夫

高橋 順子

その翌々日  
カナダへの家族旅行  
の飛行機内で

第十五回受賞作品 西沢杏子『ズレる？』



丸山豊記念現代詩賞を受賞して

西沢 杏子

少年・少女詩として出版した『ズレる？』が、現代詩の賞を受賞することは無上の喜びです。少年・少女詩と現代詩の間には、太い境界線があるように思え、その線が消えることが一途な願いでした。精神はふとしたはずみに少年になります。少女にもなります。

そんなふとしたはずみの少年や少女も、いっしょに現代を生きていえると思えるからです。受賞の喜びの一方では、過酷な戦中戦後を生きられた丸山豊先生の賞を、平凡な日常を送る私が受けてしまう不安もまた大きいのです。

けれど、この不安を抱えていれば、世界を覆う現代の不安にも、もう少し近づける気がしますし、なんだかじっと見つめることさえ出来る気がしてくるのです。

選考経過について

二〇〇五年中に国内で刊行された詩集・詩書を対象とし、本年五月二日、東京で選考委員会がひらかれました。その結果、西沢杏子詩集『ズレる？』（てらいんく刊）が選出されました。他の候補作は石川敬大詩集『九月、沛然として驟雨』、福井桂

桂子詩集『風攫いと月』です。

西沢さんの詩集は「子ども 詩のポケット」というシリーズの中の一冊として出版されました。作者の中にも子どもがいて、身に周りのさまざまなもの、猫や二輪草やたたみいわしや凹んでる朝の枕などと、挨拶をかわします。ことばがちよつとズレると、そこから詩が噴き出します。日常の澱のようなものもすくいとつていますが、大人の読者はそのへんに手応えを感じます。子どもにはちよつと難解なところもありそうですが、ことばのひびきを聞くだけでもいいでしょう。大人にも子どもにも読める、しなやかで清新な詩集を、私ども選考委員会は一致して推挙した次第です。

二〇〇六年五月二日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

清水 哲夫

高橋 順子

第十六回受賞作品 井川博年『幸福』



九州との深い縁<sup>えにし</sup>

井川 博年

詩を書き始めた少年時から憧れておりました「久留米抒情派」の詩人、そして尊敬する戦記『月白の道』を書かれた丸山豊先生のお名を冠した文学賞をいただけることは、私の無上の光栄とする所であります。

晩年に親しくさせていただきました、安西均さんが、九州の話になると、「母音」は温厚で年長者の丸山豊さんが長兄、年は下でも秀才の谷川雁さんが次兄、一番至らない私が末弟です。」とよくおっしゃってました。いまその言葉をしみじみとかみしめております。

安西さんは、どのような人にも優しくかった方ですが、私には特に親切にしていたように思います。それも私が、福岡に生まれたということだけで、私を何か郷土の後輩のように思っておられたのでしょうか、私もそのことが嬉しくて、大いに甘えておりました。

この度、生まれ故郷にほど近い久留米市に呼んでいただき、あまつさえこのような賞をいただけるということは、安西さんも含めた多くの方々の「九州との深い縁（えにし）」があるような気がしてなりません。

これで私も勝手ながら、「母音」の詩人たちから森崎和江、松永伍一、川崎洋さんらの輝かしい先輩に連なる、「久留米抒情派」の一員に加えていただけたような、晴れがましい気分でおります。

今回の選考委員のお二人方と、久留米の皆様には厚くお礼申し上げます。

選考経過について

二〇〇六年中に国内で刊行された詩集・詩書の中から、本年二月七日、東京で行われた選考委員会において、井川博年詩集『幸福』（思潮社）を選出いたしました。

こんなに親しみやすく、おかしく、味わい豊かな詩集は滅多にありません。そこには自分のドジさ加減を笑うことができ、汗まみれ血まみれの記憶をいとおしむ一人の生活者である詩人がいます。この希有な達成に私どもは感嘆し、一致して推挙した次第です。

他には財部鳥子詩集『哀蒼する女詩人の日々』（書肆山田）、川田靖子詩集『わたしの庭はわたしに似ている』（水声社）が候補作品として挙げられたことをご報告します。

二〇〇七年三月一日

丸山豊記念現代詩賞選考委員

清水 哲夫  
高橋 順子

第十七回受賞作品 古賀忠昭『血のたらちね』



受賞のことば

詩と詩の言葉から、三十年遠ざかっていました。その間、詩の言葉を探しつづけていたわけではありません。しかし、三十年という詩と詩の言葉から遠く離れた生活の日々が、私に、こんな言葉を残してしてくれたのです。

「血のたらちね」。

ここに、私は詩と詩の言葉という意味と同時に、私の三十年の空白の意味をこめてみましたつもりです。そして、ここにこうしてこめたその空白の意味が、今、こうして丸山豊記念現代詩賞を受賞することになった？

もしかしたら、三十年というこの空白を埋める言葉は、二十代の十年に近い歳月を丸山先生の身近で過ごした日常の賜物だったのかもしれない。二十代の十年に近いその日常の日々と会話は、ほとんど詩と無縁のものでしたが、考えてみるとその無縁さこそが私が本来もっている詩の言葉を、生まれたままの姿で私のこの血の中に残してしてくれたのかもしれない、と今は思えるからです。そして、そのことを先生はよく御存じであった！そういう意味でも、私はこの受賞を先生の身近で共にした日常のつづきとして「先生、ほんなら、もろとくですよ」と、先生がよく口にされていた仁丹をもらったときのように、この

生活でよごれた手のひらで、ありがたく受け、いただくとうと思

う。

末尾になってしまいました。多くの作品の中から私の拙い作品を選考していただいた先生方、ならびに関係各位の皆様へ深く感謝し、お礼申し上げます。

二〇〇八年二月十八日

古賀 忠昭

選考経過について

二〇〇七年中に国内で刊行されたおよそ二百冊の詩集・詩書の中から、本年二月八日、東京で行われた選考委員会において、古賀忠昭詩集『血のたらちね』（書肆山田）を選出いたしました。

三部構成から成るこの長編詩集は、決して読みやすい本ではありませんが、読み進むにつれて、人生のありよう、その生と死の意味などについて深く考えさせられます。重い素材にも関わらず、読後、一種爽やかな感動を覚えるのも、みずからの生に全力で立ち向かった詩人の裂帛の気合い、力技のしからしむるところでしょう。軽い言葉が氾濫する現代において、このような詩への態度は貴重だと考えます。以上、簡単ですが、選考委員が一致して推挙した所以の主たるところです。

なお、この他に川上明日夫詩集『雨師』（思潮社）、はたちよしこ詩集『いますぐがいい』（長崎出版）が最終候補作品として挙げられたことを付記しておきます。

二〇〇八年二月二十一日

丸山豊記念現代詩賞選考委員 清水 哲夫

高橋 順子